
政府の陰謀に巻き込まれた男 ぱ～と とう～

結城陸空

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

政府の陰謀に巻き込まれた男 ぱくと とうと

【Nコード】

N2283B

【作者名】

結城陸空

【あらすじ】

男は、政府の秘密を知ってしまった。その為に政府から命を狙われることに。そんな彼の命を狙われる日々を書いた物語。

（前書き）

政府の陰謀に巻き込まれた男の続編になります。前作を読んでなくても特に問題はありません。

男は、政府のある秘密を知ってしまった。

その為、政府から命を狙われることとなった。

部屋の扉が開き、男性が部屋に入ってくる。

その瞬間、四人の男に拳銃を突きつけられ、男は身動きを取れなくなってしまった。

「名を名乗れ。誰だお前は？」

拳銃を突きつけている男の一人が問う。その問いに部屋に入ってきた男は額の汗を拭くことも出来ず言われたことに答える。

「俺の名前は、小林恭介だ」

「小林恭介？ 確かに似てはいるが、奴はもう三ヶ月も学校にきていない。お前が奴である証拠はあるのか？」

「証拠だと？」

「そうだな、証拠がなければ小林恭介と認めることは出来ない。政府のスパイかもしれないからな」

他の者も小林恭介という男に証拠の提示を求めているようだ。しかし、小林恭介という男は迷っている。自分の存在を認める証拠なんてどうすればいいのか悩んでいるのだ。考え抜いた男はある物を

差し出そうとポケットに手を入れる。

「待て！ 動くな！ 拳銃を抜くつもりだろ！」

男がポケットに手を入れた瞬間、周りを囲んでいる男の一人が言う。男はその言葉に驚き手を止める。

「いや、生徒手帳を出そうとしたんだ」

「なんだ、そうか。よし、なら早くだせ。余計な真似をすると蜂の巣になるぞ」

男の過剰な行動に驚きながらも小林という男はポケットから生徒手帳を出し、周りを囲んでいる男の一人に渡す。

「ふむ、確かに。小林恭介のようだな」

「やっと、わかってくれたか」

小林はホッとしたように胸を撫で下ろすように緊張の糸が解けて動こうとした。

「待て！！」

その言葉に小林は再び身体に緊張が走り、金縛りに遭ったように動けなくなってしまった。

「この生徒手帳が偽造でない証拠はない」

「なるほど、確かに。そこに写っている写真と名前が一致しても変

装で姿を似せて、本人の口調や性格や生年月日などのデータを覚え、手帳の偽造と、指紋や網目なども本人と一致させている可能性もあるな。政府の連中ならやりかねない。なんせ俺たちは政府に命を狙われてるんだ」

「それだけじゃないぜ。奴らは異性人からさらなる新技術を得てDNA操作も出来るはずだ。証拠としてDNA検査をしても本人と一致する可能性もある」

「そうだな、ではこいつが小林恭介という証拠はないわけだ。となると俺達に危険が及ぶ前に始末したほうがいいな」

小林を囲む男達は口々に話し勝手に納得して結論付けたようだ。

「え？ おい！ 始末つて殺すつもりかよ！ そんなことをすれば、政府に命を消される前に警察に捕まるぞ！」

「それは、恐らく大丈夫だろう。俺達が警察に捕まれば政府の秘密を吐かせられる可能性があるから、政府の奴らはそうなる前に殺害の証拠をもみ消すはずだ。奴らにとってはお手の物だからな」

「うそだろ？ まさか、登校してきただけで殺されるとは、人生つて奴はどこに危険が潜んでるか分からないぜ。我が政府に命を狙われ続ける人生にアディオス」

その言葉の瞬間、男達は拳銃を降ろした。そして、しばらくの沈黙が部屋に走った。

「おはよう。小林。三ヶ月ぶりだな」

周りを囲んでいる男の一人が小林にあいさつをした。

「おはよう。っていうかやつば長くないか？ この合言葉は？」

「何を言う小林。このくらいの長さがなければ政府の奴らが変装してきても分からないぜ」

「そうだぜ、小林。俺達五人は全員が政府に命を狙われてるんだ。慎重すぎるに越したことはない」

「うむ、その通りだ。俺達は政府の力を過小評価をしていない」

みんなが待つてましたかと言うくらいに順番に話していく。

彼らは、五人とも政府の秘密を知ってしまった為、政府から命を狙われている男達だ。彼がいる部屋は手芸部の部室で、表向きは手芸部としていたのだが、その実態は政府の秘密を解き明かそうの会である。メンバーはさきほど入ってきた小林をリーダーとして、副リーダーである通称D、副班長である通称S、副キャプテンである通称B、副番長である通称レットである。

「しかし、小林なぜ三ヶ月も学校を休んでいたんだ？」

「それは、三ヶ月間も奴らの陰謀に巻き込まれていてな。学校に入ることが出来なかったんだ。大変だったぜ。朝起きると目覚ましがなっていないかったり、食事に毒をもらっていたりして、なんとか生き延び無事にここまで来ることが出来たんだ」

小林は真剣な表情で、この三ヶ月間の出来事を語りだす。そこには政府と彼との激しい戦いの言葉がつづられていた。

「さすが、リーダーだけあるな。奴らの作戦はきつとまずリーダーから潰し後はピラミッドの要領で収集がつかなくなったところを一人ずつ始末していくつもりだろうな」

副班長のSの意見である。

「奴らの作戦もだんだんと手が込んできているな。どうやらジワジワと俺達を消していくようだ」

副リーダーのDの意見である。

「俺達ももつとより慎重に動く必要があるな」

副キャプテンのBの意見である。

「小ざかしい奴らだ。政府の野郎は。正々堂々と勝負してこねえかな」

副番長のレットの意見である。

「なあ、みんな前から思っていたんだけど小林はリーダーだから良しとして。なんで副番長だけレットなんてかつこいい名前なんだ？」

「……」

「ま、まさか！！ これは、政府の陰謀かあ！！」

副リーダーであるDの叫び声が部屋全体に響いた。その怪音は部屋の窓ガラスに衝撃を与え、窓ガラスには亀裂が走り、蛍光灯は割

れ、床はその音圧に押され陥没した。

「な！！ D い！ お前、いつの間にそんなパワーを？」

そのDのパワーに部屋にいる全員が圧倒されている。

「俺の怒りが、内に眠るパワーを蘇らせたのかも知れない。仲間の命を狙う政府の人間に対抗するために手にいれた至上の力だ。レット……、お前の名前は政府の陰謀か？ 吐いてもらうぞ」

気のせいかな。Dの周りには電気のようなものが時々、見える。まるで彼の圧倒的なパワーと周りのエネルギーが触れ合う瞬間その摩擦が電気を発するように。

「……、ふふつ。俺の名前がレットなのは政府の陰謀だと？ 笑わせてくれる。そう言うお前こそ、そんなパワーを手に入れて俺達の内部から潰そうとする政府の手先ではないのか！？」

レットのその言葉に全員が、気がついたようにDのほうを見る。

「ほ、ほんとうなのか？ D？」

「俺は、ただ、お前のようにかっこいい名前がほしかっただけだ！ レットオオオオ！！」

Dの怒りは頂点に達して教室中のガラスや機械類は壊れる。そして、教室全体が傾いた。その破壊力に誰もがDに怒りを静めてほしいと願っただろう。しかし全員が分かっていた。Dの怒りを止めるすべはないと、誰もが世界の終わりを、心から想像したのだ。

その時、学校特有の予鈴が鳴り響いた。

Dの怒りは、その音によってかき消されいつものDへと戻っていた。

「あ、もうこんな時間か。一時間目が始まるな。みんな急げ!」

「ああ、くそ! Dとレットの朝練に付き合っていたら、俺はなんも出来なかったじゃないか」

「悪い、悪い。夕方からの部活じゃ必ずお前の練習に付き合うからさ。小林」

そう言つと全員は鞆を持って急いで教室へと向かう。

彼らは政府の秘密を知ってしまったため、命を狙われることになった。だが、彼らはそう簡単にやられたりはしない。日夜、いざという時に備えて鍛えているからだ。

こうして、今日もまた彼らの命が狙われる日常は続く――。

完

（後書き）

読んでいただきありがとうございます。後半なんか暴走気味なような気が。

調子に乗って第三部も書くかもしれないです。反響によりますが。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2283b/>

政府の陰謀に巻き込まれた男 ぱ〜と とう〜

2010年10月12日03時02分発行